

都市河川におけるふれあい推進事業に伴う地域ポテンシャルに関する研究

福岡大学大学院 学生員○梅崎健史 福岡大学工学部 正会員 渡辺亮一
 福岡大学工学部 正会員 山崎惟義 福岡市役所 正会員 高辻伸彰

1. はじめに

その昔、川では子供達が泳いだり、魚を採ったりする光景は当たり前のように見られていた。このため、流域に住む人々は日頃から川に注意を払い、川を汚す人もいなかった。また、川で起こる微妙な変化にも敏感であった。しかし、昭和30年代を境に全国各地で都市化が進み、川はコンクリートに覆われた構造物へと変わっていった。その結果、今現在では人々は川にあまり近づけなくなり、川に対する興味を失っていった。そこで、我々土木技術者は流域住民の方に川に再び興味を持っていただくきっかけをつくり、川の魅力を伝え、川に対する意識を高めて行く必要があると考えられる。本研究では、都市河川で行われている地域活動で得たアンケート結果をもとに、川を活かしたまちづくり事業をより魅力的にし、継続して行くためには何が必要であるかを考えることにした。

また、室見川・那珂川・樋井川の流域住民に関してソーシャル・キャピタル（以下SC）を用いて、地域ポテンシャル（＝地域力）の検討を行った。

2. 対象河川イベントの概要¹⁾

1) ふれあい室見川（写真1）

早良区で行われているプロジェクト Muromi の一環で、市民と行政の協働による企画である。直接川にふれあうイベントや市民手づくりの19個のイベントを開催した。しかし、この6年間行われてきた事業は2007年度をもって終了した。



写真1 ふれあい室見川

2) 那珂川フェスタ（写真2）

博多区美野島南公園沿いの那珂川で行われた市民と行政の協働によるイベントである。2006年も人気があったミニ水族館をはじめ、“自然”にふれあえるイベントを9個開催した。2007年には川に親しんでいただくということで、投網体験を取り入れた。しかし、この3年間行われてきた事業は2007年度をもって終了した。



写真2 那珂川フェスタ

3) 樋井川一斉環境調査（写真3）

地域住民「樋井川を楽しむ会」が主体となって行っているイベントで、今年で3年目を迎えるイベントとなった。樋井川の上流から下流までを15個の調査地点とし、水質・生きもの（植物）・ゴミ組成調査を同日同時刻に行った。簡易的な調査なので大人から子供まで参加しやすいイベントです。地域住民、NPO、企業、高校生、小学生などの参加者が117人集まり、交流を深めた。



写真3 樋井川一斉環境調査

3. 研究手法

3.1 イベントによるアンケート調査

アンケート調査は、すべて対面による聞き取り方式でイベントに参加された来場者の方に行った。アンケート内容は来場者の属性やまちづくりイベントに対する意識調査である。2006年度も2007年度とほぼ同じ部数のアンケートを回収した。2007年度の回収部数はふれあい室見川では、116部、那珂川フェスタでは43部であった。

3.2 ソーシャル・キャピタル（SC）と地域力との関係

以前からSCの研究はなされているが、Putnam（1993年）はSCを「人々の協調行動を活発にすることによって社会の効率性を高めることができる『信頼』『規範』『ネットワーク』といった社会組織の特徴」と定義している。また、地域力とは、河上²⁾によると、(1)「地域への関心力」(2)「地域資源の蓄積力」(3)「地域の自治能力」の3つから構成されると定義している。また、SCと地域力は同義と考えてよいと提言している。つまり地域活動からそれらを見ていくことで、地域の問題を解決する力の多寡がわかる。

4. 結果及び考察

4.1 川に関心が持てるイベント

図1に示す結果より、川に関心が持てるイベントとして、ミニ水族館が最も効果的であると考えられる。それは、今まで「那珂川フェスタ」において2年連続ミニ水族館を実施したところ、イベント全体で一番人気があったからである。また、2006年「那珂川フェスタ」で初めてカヌー体験を実施し、人気があったが、2007年は人気がなかったことからわかる。その結果から、毎年のようにミニ水族館は人気があり、川に関心が持てるイベントであることには間違いのないといえる。

また、ミニ水族館と同時にさわるふれる体験コーナーを

設けてザリガニ釣りを実施したところ、参加者の多くが楽しんでた。そのことから川に関心を持っていただけるきっかけとなったと考えられる。

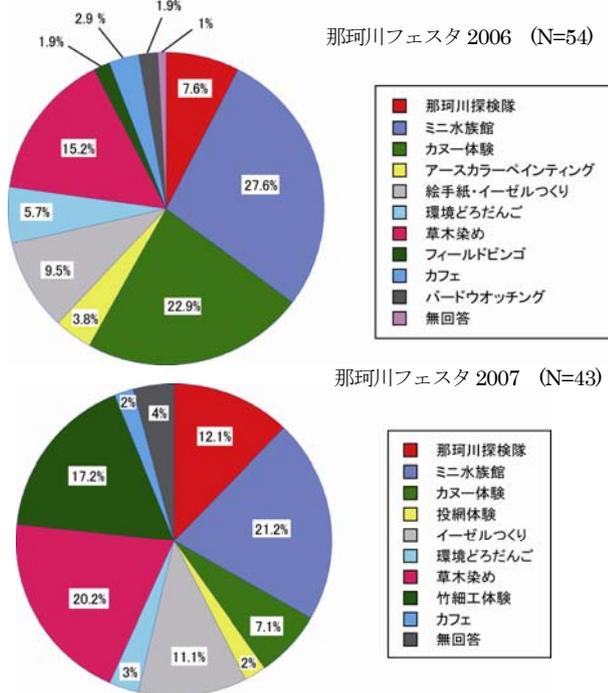


図1 イベントでよかったもの(那珂川フェスタ 2006、2007)

4.2 今後の川を活かしたまちづくりのあり方

2007 年度で市民と行政が協働で企画実施した「ふれあい室見川」、「那珂川フェスタ」は終了したので、今後も継続的に地域住民の方が川に関心を持てるようなイベントを実施する必要がある。そこで樋井川においては、行政主催で行ったワークショップをきっかけに我々と地域住民で運営される「樋井川を楽しむ会」は毎月一回の定期清掃を行うようになった。それを、5年前からずっと継続してきたが、ごみの量が全く減らないことから、まず2006年度に第一回樋井川一斉環境調査を行った。そして、上流から下流までの地域住民の方をつなげた結果、昨年からは樋井川を楽しむ会の方々が樋井川ごみ0(ゼロ)プロジェクトと称してゴミ組成調査(写真4)や樋井川あおぞら美術展(写真5)を新しく企画をし、実施した。このことより今後の川を活かしたまちづくりのあり方は川を通してネットワークを構築し、情報の共有化をはかって行ければ地域が活性化し、川に再び関心を持っていただけるのではないかと考えられる。



写真4 ゴミ組成調査 写真5 あおぞら美術展

4.3 ソーシャル・キャピタル(SC)から見た地域活動

(1)「地域力への関心力」について、長野³⁾のアンケート調査、未来についての項目で、「今後どういう河川にしたいか」と尋ねたところ、自然豊かな川にして行きたいと答えている方が樋井川においては52.1%で、室見川39.1%、那

珂川43.6%に比べ、共通の生活問題点として意識が高いことがわかった。実際に樋井川は、川に容易に入ることができないため、地域住民の方は「自然豊かな川」を求めていることがわかった。(2)「地域資源の蓄積力」について、樋井川において、地域居住環境状況のハード面は公園、学校、公民館、その他施設もたくさんあり、住民組織の結成状況のソフト面は、例として樋井川を楽しむ会の活動の拠点である長尾公民館において見てみると育成会や組合など、学校関係(PTA)、自治会があり、地域の方がイベントに参加できる環境、集う場所を整えていることがわかった。(3)「地域の自治能力」について、樋井川においては、洗剤の不法投棄、ゴミのポイ捨て、コイの放流、川に入る場所がないなど地域のさまざまな問題があり、それらを地域住民の共通する問題としてとらえ解決していこうと「樋井川を楽しむ会」が中心となって活動を行っている。

(1)～(3)の結果から、樋井川において、自然豊かな川を今後、目指して行きたいという要望が強いことがわかった。また地域活動が積極的におこなわれていることから、今後の活動継続も期待できるが、市民主体で行うのは難しいといえる。そこで、私たち学生や行政がサポートして行けば、地域活動を継続していけると考えられる。2005年度市政に関する意識調査福岡市より、地域活動を大切と思う人(N=1467)からの意見として「地域を活性化するためには何が不足しているか」という質問に対して一番多かったのが、協力者が少ないが31.9%、リーダーがいないが12.5%であることがわかってのことからも学生や行政の参加の有無がとても地域活動の活性化を促す要因であることは間違いない。

5. 結論

2007年度で室見川・那珂川において川を活かしたまちづくり事業は終了した。しかしながらアンケートの中での意見で『今後もこのようなイベントを続けて欲しい』という意見が多かったことより、川を活かした何らかのイベントを継続して行っていく必要があると考えられる。これに対して、市民主体で行われている樋井川では、5年間の間、川を活かしたまちづくりが継続できている。これらのことから、室見川、那珂川流域においても流域において様々な地域活動が行われているので、樋井川を事例として、「樋井川一斉環境調査」のような面的なつながりを流域全体で取り組んで行ければ、今後、ますます川を活かしたまちづくり事業が市民主体で展開されていくと考えられる。また地域住民の方が川のイベントを継続しやすいように行政または学生である我々がサポートして行けば、イベントが継続し活性化していくことができると考えられる。

参考文献

- 1) 高辻伸彰：川を活かしたまちづくり事業の比較分析に関する研究，福岡大学工学部卒業論文，2005。
- 2) 河上牧子：「地域力」と「ソーシャル・キャピタル」の概念に関する計画論的考察，都市計画論文集，Vol. 40-3，pp. 205-210，2005。
- 3) 長野紋子：都市河川の今後のあり方に関する研究—福岡市・樋井川について—，土木学会西部支部講演概要集，pp. 989-990，2006。